

特集

命の重さを考える

ちいさな命を大切に出来る社会に

日本で飼われている犬猫などのペットの数は15歳以下の子どもの数よりも多く、4世帯で1軒の割合で飼われているとも言われています。犬や猫は家族の一員という意識が普及している一方で、モノのように簡単に手に入れ、飼育途中で安易に捨ててしまう人も多くいます。また、犬猫に不妊手術を施していくために、保健所などに捨てられる子犬や子猫は後を絶ちません。初めから殺されるくらいなら、親犬や親猫の不妊手術をすれば済む話です。人間の子どもなら考えられないことも、犬猫となると未だ命の重さについて深く考えることが少ないようです。実際、日本の法律でも動物は「物」＝動産として扱わ

れていて「動物の愛護及び管理に関する法律」の第一章第二条に記されている「動物が命あるものであることにはかんがみ、何人も、動物をみだりに殺し、傷つけ、又は苦しめることのないようにするのみではなく、人と動物の共生に配慮しつつ、その習性を考慮して適正に取り扱うようにしなければならない。」とでは、大きな隔たりを感じます。動物の飼い主は、また飼っていない人も「命」を尊び、望まれずして生まれ殺される命を作りださないように、ちいさな命にも優しい思いやりのある社会を作つて行きたいものです。今回の特集は命に関わることの一部を書いてみました。

一部の心ない人たちに動物たちは翻弄され苦しめられています。一人一人が出来ることは小さな事でも、みんなの力が集まれば大きなパワーになります。「わたしたちにできること」始めてませんか？しつぽある友のために。

ワクチンの重要性

▼犬の場合、狂犬病予防法に基づき飼い主に法律で狂犬病ワクチン接種が義務付けられていますが、犬猫にとってもう一つ大切なのが混合ワクチンです。子犬・子猫は母親からの移行抗体の切れる頃が、病気に対する抵抗力が失われる大変危険な時期で、ウィルスに感染すると死亡率は高くなります。（ただし、免疫のない母親から生まれた子犬・子猫には移行抗体はありません。）勿論、成犬・成猫でも抗体がないとウイルスに感染します。現在、混合ワクチンは研究が進み何種類もの混合ワクチンがあり、接種することで感染を防ぎ大事に至らないばかりか、周囲の動物からの感染や周囲の動物への伝染も防ぐことが出来ます。混合ワクチン接種が法律で義務付けられてなくとも、必ず愛犬・愛猫に接種してください。▼今夏、札幌市動物管理センターのホームページでご存じの方も多いと思いますが、センターで犬バルボが発生しました。犬バルボ免疫を持たない収容犬が次々とバルボに感染し子犬が何匹も死亡しました。バルボなど感染症はどこの管理センターでも発生していることで決して珍しいことではありませんが、抗体を持たない犬が次々と感染し譲渡の可能性を絶たれたことが大変悔やまれます。迷子で収容され感染した場合など、収容期間中は飼い主本人しか引き取りする事ができないので、十分な治療が出来ず死亡してしまうこともあります。大切なことは未病に努めることで、しつぽの会で保護した犬猫は体調に問題がなければ、即日混合ワクチンを接種し感染予防に努めています。現状を知り正しい知識を持つことで、感染症から愛犬・愛猫を守るのは飼い主自身です。（※猫バルボも犬とほぼ同じです。成犬・成猫の場合、年に1回追加接種し予防効果を維持してください。）

※しつぽの会では、保健所などに収容中の犬猫が感染症で命を落とし、譲渡の可能性が絶たれることを非常に残念に思っています。混合ワクチン接種は狂犬病ワクチンのように法律で義務付けられていなくても、飼い主が行うのは当然ですが、飼い主の引き取りや新たな引き取り手が現れる前に、感染症で命を落とすことがないように、行政には犬猫が収容されたらすぐに混合ワクチンを接種して欲しいと考えています。

殺処分という 辛い現状

▼2007年、日本では犬猫合わせて年間310,457匹（犬100,963匹、猫209,494匹 地球生物会議ALIVE調べ）が、私たちの住む北海道でも2,354匹の犬、6,161匹の猫（2007年北海道自然環境部より）が“不要な命”とされ殺処分されています。犬や猫を放棄する人の理由の大半が引っ越し・飼い主の死亡や入院・家族にアレルギーがあるなどの理由で、人間側の都合により多くの命が奪われています。犬猫の世話を放棄した人々があげた最も多い理由は引っ越しです。転勤・失業・離婚など事情はさまざまです。その理由の多くが一戸建・ペット可のマンション・アパートから転居先ではペット飼育が禁止されているというケースです。果たして、そう言った理由は命と引き換えになるほどのものでしょうか？最近はペット可の住まいに人気があり、物件も増えてきていますし、根気よく探せば見つかるはずです。次に放棄の理由が多いのが、飼い主の死亡や入院・施設などへの入所ですが、これは動物を飼う前に万が一に備えセカンドファミリーを確保してから飼うべきではないでしょうか？またアレルギーなどで世話ができない理由なら、あらかじめ家族で話し合って無理なら最初から飼わないのが動物への愛情です。▼テレビニュースの映像などでご覧になった方も多いかと思いますが、殺処分の方法は炭酸ガスを処分機に送り窒息死させるもので、薄くなっていく空気の中で動物たちはもがき苦しみながら息絶えていきます。▼どうし

※しつぽの会ではこうした現状を変えたいと思っています。実際に大幅に処分数を削減した自治体もあります。熊本市動物愛護センターは動物を放棄する飼い主に終生飼育するよう時間をかけて説得をしたり、新しく飼い主を希望する方に講習会を行つて飼い主の意識を向上させています。また動物が病気などで生存が厳しい場合など、やむをえず処分しなければならない時には、ガスによる殺処分は行わず麻醉薬で安楽死させています。

熊本市動物愛護センター

http://www.city.kumamoto.kumamoto.jp/content/web/esp/kiji_detail.asp?NM=1&ID=2717&LS=52

翻弄される命 動物の遺棄は犯罪

▼10月に入り当会は由仁保健所から3匹のダックスを保護しました。3匹とも糞尿まみれで、身体は悪臭と汚れで酷い状態でした。3匹は由仁町の神社で通報を受けた役場に保護されたのですが、収容期限を過ぎても飼い主の迎えはなく、明らかに繁殖犬が捨てられたと直感しました。しかし、事件はそれだけではありませんでした。引き取りした翌日、3匹を連れかかりつけの病院に車で向かっていると、畠の道端で当会のボランティアさんが畠の中を食い入るように見ていきました。驚いて車から降りて話を聞いてみると、畠にダックスが6匹は捨てられているとの話。側に捕獲機が設置されていて、由仁町役場の職員さんが通報を受けて設置したこと。一緒に畠に入って捜索をしてみましたが、その日は折しも台風18号が接近中の大荒れの天気で、探すのも困難をきわめました。人間を怖がっている様子もあったし、呼んでも餌を見せても近寄つてこないので、「どうか捕獲機にかかるとれますように」と願い現場を後にしました。夜が明けて翌朝、現地の捕獲機には“良かった！”逃げていたダックスが1匹かかっていたそうです。相当お腹も空いていたのでしょうか・・・午後に1匹、翌日にもう1匹を捕獲することが出来ました。凄まじい台風の中ですぶ濡れになった小さな身体は氷のように冷たく、寒さと恐怖でブルブルと震えが止まらなかったそうです。保護出来た3匹は無事に譲渡されました。10月20日現在、残りの3匹が捕まらず行動範囲が広くなって捕獲しにくくなっています。キツネに追いかけられていたとの情報もあり、この寒空の下で飢えと寒さと恐怖で苦しんでいると思うと心配でたまりません。また、酷い扱いを受けていた繁殖犬のためか、人間は怖いけれど車の怖さを知らないので、交通事故も心配されます。現場に関わっているボランティアさんは、「必死に逃げながら、水溜りの泥水を飲んでいた姿が忘れられない」と辛い心境を語っていました。おそらく当会で保護した3匹と同じ繁殖者が遺棄したのでしょうか。少なくとも9匹は捨てている計算になります。犬や猫は人目につかない山や川に捨てられたら、野生動物ではないので生きて延びて行くことはできません。衰弱死したり野生動物の獲物になったり、心ない人間に虐待されたりとその最期は大変悲惨なものです。動物の遺棄は犯罪です。人として絶対に許される行為ではありません。「動物の愛護及び管理に関する法律」にも60万円以下の罰金が懲役に課せられると明記しています。

追記：10月22日、由仁保健所から長沼町でダックス4匹を保護したとのお知らせをいただき、当会が引き取りました。畠にいたダックスとは別なダックスたちで、当会に来た子を含めると数日で最低13匹は捨てられたことになります。強い憤りを感じてなりません。

※動物の遺棄が法律で禁止されていても、後を絶たないのは何故でしょうか。人間と同じように一つの命を持って生まれて来たとはいえ、まだまだ、動物の命に対しての価値観が低いこともあります。北海道では犬猫を保健所に持ち込む際に、引き取り料が有料化されていて、一律一匹につき2100円がかかりますが、札幌・小樽・旭川・函館の市立保健所では未だ有料化されていません。しつぽの会では、以上の四市も早急に有料化にすべきと考えています。有料化で徴収した費用を収容動物のワクチン代に充てるなどして、収容中に感染症で死亡する更なる不幸に見舞われないよう、また、一匹でも多くの犬猫に引き取り手が現れることを願っています。勿論、放棄など虐待する人間がいる限り問題はエンレスです。

※動物たちは人間と共に暮らしていくことで、日々の食餌や健康、安全などが保障されます。しかし、私たちが世話を怠ると途端に彼らは困窮してしまいます。人間に依存して生きている彼らですが、犬や猫は人間のように言葉で想いを伝えることは出来ません。幸せに生涯を終えるか、残念な結果で最期を迎えるのかは、人間の意識で決まると言つても過言ではありません。ちいさな「命」の重さを考えるきっかけになつただけたら幸いです。